

電に代金を負担させるべきだ。このままでは何十年どころか数年先に、働く人がいなくなる。それは恐ろしい事態を引き起こすことになる。(やまさき・ひさたか/たんぼ舎副代表、写真提供も筆者)

## 必ず起こる第2の福島 川内原発再稼働を止めましょう

向原 祥隆

### 国、電力、県一体となった動き

伊藤祐一郎鹿児島県知事は、今年1月6日の年頭会見で、6月県議会で川内原発の再稼働について判断する旨表明しました。つまり、了承するということです。

3月の規制委員会の審査終了を前提に、国による説明会を3回、アriba的に開催し、議会でゴーサインを出すというもの。

「世界に類を見ない極めて微に入った審査」(毎日)と規制委員会を持ちあげる発言までしています。

それを受けて、3月13日、原子力規制委員会は、九州電力川内原発1、2号機を優先的に審査することを決めました。川内を皮切りに、日本中の原発を再

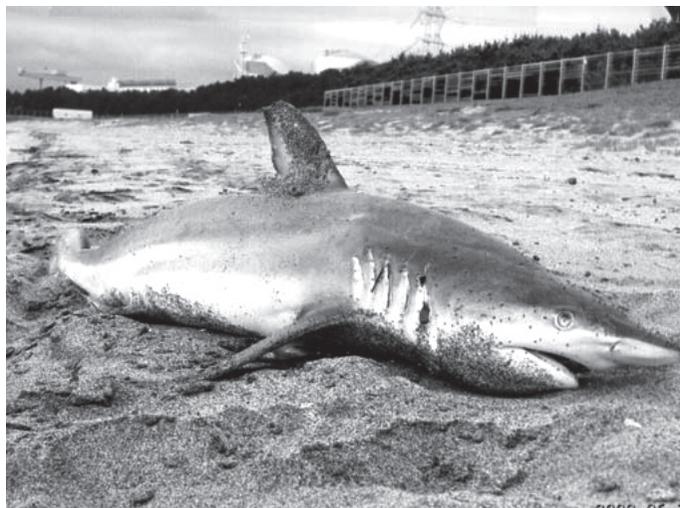
稼働させるというわけです。こうした流れは、年末のうちに密かに練られ、国、電力、県の間で合意されたのでしよう。今まさになりふり構わず、再稼働につき進んでいます。

**知られていない海洋環境破壊**

冬場、川内原発の温排水の放水口周辺は、釣り人の間では有名な釣り場となっています。釣り雑誌にもたびたび紹介されるほど。他所では釣ることのできないカスマアジ、ロウニンアジなどが大量に釣れるのです。なぜ他所では釣れないのか。これらの魚は南方系で、夏に日本周辺まで北上し冬場に海水温が低下すると死んでしまう死滅回遊魚や、水温の高いところを好む魚たちなのです。原発周辺が高温化して冬場も集まっているのです。いないはずの魚が、うようよいる。これが環境破壊でなくて何なのでしょう。これが異変は、それだけではありません。現地の寄田町に住むウミガメ監視員の中野さんが記録しているサメの死亡漂着の数には驚かされます。2009年の1年だけで29匹も死んで打ち上げられました。エイやダツの死亡漂着の数は数百匹に上ります。

このような死亡漂着の見られる海岸は、鹿児島県のどこにもありません。サメの研究者によれば、大量のサメの死亡漂着は世界にも例がないと言います。

原発は核燃料を燃やしたエネルギーの3分



川内原発の温排水の放出される海岸で多発する海洋生物の死亡漂着

の1を電気にするだけで、残りの3分の2は廃熱、つまり温排水として海に捨てています。温排水の問題点として、水口憲哉東京海洋大学名誉教授が指摘するのは、次の5点。①7度上昇とされている熱、②パイプに貝類の付着を防止するための塩素剤、③高速の海水がパイプを通過する際におきる減肉由来の金属イオン、④温排水に混ぜて投棄される放射能、⑤取水時に連行されるプランクトンや魚介類の稚魚、卵の死滅。

サメなどの死亡原因は特定されていませんが、温排水との関連は間違いない、と水口憲哉名誉教授は指摘します。

ちなみにこの死亡漂着は、川内原発が稼働停止して以降、一匹も見られません。

## 惨たんたる漁業

原発周辺海域の恒流は南流です。温排水の流れて来る、いわば下流に当たるいちき串木野市羽島地区の漁民の話を聞くと、海の異変は顕著です。

かつて、わざわざ伸びていたワカメ、海岸線を覆い尽くしていたヒジキやテングサが、原発が稼働して20年ほどたつと、南10kmの羽島付近まで全滅しました。それも、原発に近い方から消えたといえます。海藻が消えると同時に魚も消えました。

不漁はひどく、近隣漁協ではかつての5分の1以下に漁獲が落ち込んでいます。まさに惨たんたる状況です。

川内原発が全面停止して2年半を過ぎ、羽島に海藻が戻りつつあります。小さいながらもヒジキが復活しているのです。

温排水については、大量に放出されている放射能、九電によるモニタリングデータの改ざん、一旦放出した温排水の再取水（再循環）の問題などもあります。紙数の関係で省きます。

## 見過ごせない火山、活断層

こうした日常的な環境破壊のほかに、大事故の可能性も、川内では多々指摘されます。

第一に火山の問題です。鹿児島島の火山は桜島が有名ですが、実はいくつものカルデラがあります。あたりを一瞬にして焼き尽くす大

2014年3月16日、再稼働反対の集会に6000人（鹿児島市）



規模火砕流に襲われる可能性があります。

川内原発には、2万7千年前の始良カルデラによる入戸火砕流、10万5千年前の阿多カルデラからの阿多火砕流、33万年前の加久藤カルデラの加久藤火砕流が到達しています。

最初、九電は火砕流の痕跡が敷地内ないから到達していないと言ってきました。それはウソでした。

しぶしぶ九電は到達したことを認めますが、今度は予測できると言い始めました。何の根拠もありません。仮に予兆があったとしても人間は逃げられませんが、川内原発のプールにある使用済み燃料は逃げられません。

活断層の問題もあります。

2013年2月、政府・地震調査委員会

は、九電がこれまで国に報告していた原発周辺の活断層評価を大幅に見直す報告書を公表しました。例えば甕海峡中央断層などは、16km→38km、マグニチュードも6.8から7.5に評価し直しました。委員会の議事録を見ると「委員（九電の）解釈はとにかくひどいものである」と酷評しています。

また報告書は「今回の評価対象に含まれていない断層が活断層である可能性も否定できない」と、さらなる追加調査を求めています。議事録には、今回評価した断層が、川内原発に一層近づく可能性も示されています。

川内原発直近1kmには、川内川河口推定断層が指摘され、巨大活断層の可能性も指摘されています。

この2月、炉心からおよそ800mにある林道に、破砕帯を伴う断層が発見されました。12万～13万年前以降に動いた活断層の可能性が高いと評価されました。

こうした様々な問題について、規制委は九電の報告をうのみにするだけで、何ら自ら調査していません。

川内原発は日本の最西端に位置しています。事故が起きれば偏西風に乗って放射能は日本中を汚染するでしょう。日本は不毛の地になる。それは、福島第一原発事故で放射能の8割が海の方に飛んでいったことで示されます。

むざむざ殺されるわけにはいきません。

阻止の闘いに全力を尽くします。ご支援、よろしくお願いします。

（むこはら・よしたか／反原発・かごしまネット代表、写真も筆者提供）

運動資金カンパのお願い

郵便振替 反原発・かごしまネット

01780171137859